

教師教育の専門的研究のための 修士課程カリキュラム（案）

監修：大阪教育大学大学院教授 木原 俊行

2019年3月

目次

教師教育の専門的研究のための修士課程カリキュラム（案）	3
-----------------------------------	---

講義科目シラバス（案）

①A 原理的（思弁的）：教職の歴史，教師像	6
②B 記述的（量的，質的）：教師発達学（教師の力量と成長）	9
③B 記述的（量的，質的）：授業研究の理論と実践.....	12
④C 開発的：教師の力量形成プログラムの開発.....	14
⑤C 開発的：カリキュラム開発の実践的研究	16

実習科目シラバス（案）

⑥ 談話分析（授業研究会の記録分析）	18
執筆者一覧.....	20

教師教育の専門的研究のための

修士課程カリキュラム（案）

教師教育を専門的に研究する人材を養成するカリキュラム（修士課程）は、大別して、教師教育研究の理論を体系的に会得するための講義科目、具体的に研究活動を体験するための実習科目、そして、両者を融合させ、研究課題に対して実証的・実践的活動を繰り広げる課題研究科目（修士論文の作成）で構成される。

1. 講義科目 2単位×8科目 = 16単位

「教師教育」研究は、様々な教育学研究の方法論を使い分けたり、組み合わせたりして、進めることになろう。その基本は、教師像の理解である。教師とはいかなる存在であるかについての吟味は、あらゆる教師教育の研究と実践の礎を形成する。それは、教職の歴史や教える－学びの関係等の思弁を伴おう。一方、教師教育の実践的研究は、実際の学校現場等に接近し、生きた人間を相手にして、具体的な取り組みを企画・運営することとなる。それは、特定の教師像に依拠しつつ、現在進行形で進めざるを得ない。しかしそれゆえに、臨床の世界において、一定の影響力をもちうる。換言すれば、現象を変える可能性を有している。もちろん、実践を計画したり評価したりするためには、現状を把握したり、実践の過程を記録したりする営みが必要であり、有用である。以上の視座からすると、教師教育研究の講義科目は、「A原理的」「B記述的」「C開発的」という3つの方法論に位置づくものに大別されよう。

また、教師を、成長志向的存在としてとらえる、教室で授業やカリキュラムを創造する主体として理解する、そして学校・制度・社会のエージェントとして解釈するという、3つの次元で把握することもできよう。

これらの方法論と次元を交差させると、次のような枠組みを構成することができる。朱字のものは必修科目，黒字のものは選択科目として構想した。

方法論と次元	1. 教師	2. 授業・カリキュラム	3. 学校, 制度, 社会
A 原理的 (思弁的)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職の歴史 <歴史上の著名な教育者>, 教師像 ・ 教育教育者 ・ 教師教育の国際比較 		
B 記述的(量的, 質的)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師発達学 (教師の力量と成長) 	<ul style="list-style-type: none"> * 授業研究の理論と実践 * すぐれた授業やカリキュラムの事例 	<ul style="list-style-type: none"> * 教師のライフヒストリー * 教職コミュニティ * 学校におけるリーダーの役割
C 開発的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師の力量形成プログラムの開発 	<ul style="list-style-type: none"> * 学習環境デザインの実践的研究 * カリキュラム開発の実践的研究 	<ul style="list-style-type: none"> * 学校組織開発 * 教師・教育コミュニティの創発

2. 実習科目 2単位×4科目=8単位

教師教育の実証的・実践的な研究は、フィールドに出向いたり、データを操ったりするデザインに基づく。それは、量的なものや質的なものに大別されるが、教師の一人称の語りやアクションの観察等を、比較的重視することになる。

- ・ ナラティブ研究
- ・ 談話分析 (授業研究会の記録分析)

- ・カリキュラム評価のための尺度構成
- ・教育的リーダーのシャドウイング
- ・校内研修や行政研修の企画・運営

3. 課題研究科目（修士論文の作成） 2単位×3科目=6単位

1や2を経て、教師教育の研究課題を定め、それを実証的・実践的に追究する、一連の科目群を設定する。課題研究1では、研究課題に関わる文献研究を繰り広げて、当該課題の教師教育研究としての独自性を確認する。次いで、課題研究2では、調査や実践の計画を策定し、精錬させる。また、一部実行する。課題研究3では、調査や実践を持続的に展開するとともに、その知見を論理的に整理し、考察する。また、次なる研究課題を明らかにする。

- ・課題研究1
- ・課題研究2
- ・課題研究3

以下、講義科目と実習科目の概要、いくつかの科目のシラバスを提示する。

A 原理的 (思弁的)

授業科目名：教職の歴史・教師像		単位数：2		
担当教員：				
曜日時限：		開講期：前期		
キーワード：西洋教育史，公教育，批判的教育学		授業形態：講義，演習		
到達目標 ※事務で入力します。				
3つの知 (学習成果の指 針)	学問知： *	技法知：	実践知：	*印の付いた知を修得で きます。
授業の到達目標 <p>歴史的変遷によって大きく変化してきた教職・教師像を社会的・経済的背景を踏まえながら説明できることは、教育実践研究を展開していく上で土台となる要素である。その視点を踏まえ、現在今後求められる教師像を具体的に論じられることを授業のねらいとしている。具体的には、次のような目標を満たすことが期待される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・欧米における教師像の歴史的変遷を概説できる。 ・それぞれの時期における社会的・経済的背景に即して教職や教師像について捉えながら、批判的視座をもって考察できる。 ・社会的・経済的変化の視点を踏まえつつ、今後求められる教職や教師像について具体的に説明できる。 				
授業の概要 <p>本科目では、世界史における社会的・経済的変化，それぞれの文脈で登場してきた教育機関や学校のあり方を交えながら，教職や教師像の歴史的変遷を学ぶものである。その視点を踏まえ，今後求められる教師像を考察するのがねらいである。</p> <p>数回ごとに題材に関連した資料を収集し，ディスカッションを行い，受講者同士でのテーマに関する理解を深め，知見を広げる活動を取り入れる。</p> <p>最終的に公教育の理念と現場のニーズ，自発性と強制性，教科等の学問と生活経験といった相反するテーマをつなぐ教師のあり方を理解し，教師教育を通じていかなる教師を育成するか，批判的教育学を踏まえつつ，学校・制度・社会のエージェントとしていかなる実践を展開するべきかについて考察していく。</p>				
授業の計画(準備学修を含む) <p>第1回：オリエンテーション 学校前史 (中世，宗教改革)</p> <p>第2回：コメニウスによる近代学校の構想とプロイセンにおける公教育の展開</p>				

第3回：市民革命と公教育（コンドルセの理念）		
第4回：第1回～第3回を踏まえて「公教育と教師の仕事」についてのディスカッション		
第5回：ペスタロッチとフレーベルの実践		
第6回：ヘルバルト学派による教授学的确立		
第7回：産業革命を契機とした学校の組織化		
第8回：第4回～第7回を踏まえて「教師による自発性の尊重と組織的な指導」についてのディスカッション		
第9回：新教育の展開1—経験主義カリキュラム（デューイ，キルパトリック）		
第10回：新教育の展開2—個別化と共同体の志向（ドルトンプラン，フレネ教育）		
第11回：第9回・第10回を踏まえて「経験主義を基盤とした実践から見る教師の実践の在り方」についてのディスカッション		
第12回：批判的教育学の視座—フレイレの被抑圧者の教育学		
第13回：批判的教育学の視座—公正・社会正義を目指す教育実践にみる教師像		
第14回：第12・第13回を踏まえて「批判的教育学の具現化」についてのディスカッション		
第15回：まとめ—今後の教職や教師像をいかに描くか		
アクティブ・ラーニングのための工夫 (導入している工夫に*印を記入してください。)	(1)学生主体による学習形態の導入に関する工夫 ペアワーク，グループワーク，ジグソー法，反転授業など	*
	(2)学生が主体的に行う活動を導入する工夫 展示や作品の制作，調査，観察，実験，ロールプレイ，ゲーミング，プレゼンテーションなど	
	(3)教員と学生の双方向性の確保，課題設定の工夫 コミュニケーションカード，レポート，演習など	*
	(4)ツールの活用に関する工夫 クリッカー，e-learning など	
成績評価の方法		
<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の講義におけるワークシートとリフレクション（30%） ・ディスカッションに関する資料準備と議論への貢献（30%） ・これまでの議論を踏まえて，今後の教職や教師像をいかに描くか（レポート）（40%） 		
テキスト		
特になし		
参考文献		
<ul style="list-style-type: none"> ・藤井千春『時代背景から読み解く西洋教育思想』ミネルヴァ書房，ISBN：9784623077120 ・パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』亜紀書房，ISBN：9784750515458 		

問い合わせ先 e-mail

オフィスアワー

B 記述的 (量的, 質的)

授業科目名：教師発達学 -教師の力量と成長-				単位数：2
担当教員：				
曜日時限：			開講期：前期	
キーワード：教師教育，教師の成長，資質能力，リーダーシップ，教師像			授業形態：講義，演習	
到達目標 ※事務で入力します。				
3つの知 (学習成果の指 針)	学問知： *	技法知： *	実践知：	*印の付いた知を修得 できます。
授業の到達目標 これまでに学んできたことや体験してきたことをもとに，教師教育学についての知識を再構築する。具体的には，次のとおりである。 <ul style="list-style-type: none"> ・国内外の文献・研究のレビューをすることができる。 ・教員養成教育，現職教育に関する基礎概念を説明できる。 ・教師教育研究に関する研究手法を理解し，用いることができる。 				
授業の概要 本講義では，専門職としての教師の発達と，それを支える教師教育のあり方を，学術的に研究するための基礎的知識・技能を学ぶ。国内外の文献をレビューしながら，具体的な取り組みを習得するとともに，教師教育の現状と課題を学ぶ。そして，学術的な研究の基礎的知見や方法を，受講者が自ら創出する。				
授業の計画(準備学修を含む) 第1回：講義内容・方法に関するオリエンテーション 第2回：教師教育の基礎概念・基礎知識 第3回：教師教育者として備えるべき資質能力 第4回：自分の授業を知る方法1：授業日誌法 第5回：自分の授業を知る方法2：カード構造化法 第6回：自分の授業を知る方法3：カテゴリー分析 第7回：教師の成長のための「学習する学校」 第8回：自分の授業を考える方法1：校内研究 第9回：自分の授業を考える方法2：同僚教師との対話 第10回：自分の授業を考える方法3：授業リフレクション				

<p>第1 1回：教師に求められるリーダーシップ</p> <p>第1 2回：参加型授業研究による教師の協働</p> <p>第1 3回：学校を基盤としたカリキュラム開発</p> <p>第1 4回：教師の「やる気」</p> <p>第1 5回：複雑で多様な社会に求められる教師像</p> <p style="text-align: center;"><レポート課題></p>		
アクティブ・ラーニングのための工夫 (導入している工夫に*印を記入してください。)	(1)学生主体による学習形態の導入に関する工夫 ペアワーク, グループワーク, 事前の文献調査	*
	(2)学生が主体的に行う活動を導入する工夫 調査, 研修の企画, プレゼンテーション	*
	(3)教員と学生の双方向性の確保, 課題設定の工夫 コミュニケーションカード, レポート, 演習	*
	(4)ツールの活用に関する工夫	
成績評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業内におけるペアワークやグループワークの議論, その結果のプレゼン (50%) ・ 最終レポート (50%) 		
テキスト 特になし		
参考文献 <ul style="list-style-type: none"> ・ Botich, Gary D. (2014) Effective Teaching Methods: Research-Based Practice, Pearson ・ Day, C. and Gu, Q.(2014) Resilient Teachers, Resilient Schools, Routledge. ・ Gewirtz, S.; Mahony, P.; Hextall, I. and Cribb, A. (2009) Changing Teacher Professionalism: International Trends, Challenges and Ways Forward, Routledge. ・ McIntyre, D. John, Byrd David M. (2000) Research on Effective Models for Teacher Education, Crown Press. ・ Schon, Donald A. (1983) The Reflective Practitioner, Basic Books. ・ Tanaka, K., Nishioka, K. and Ishii, T. (2017). Curriculum, Instruction and Assessment in Japan: Beyond Lesson Study, Routledge. ・ Willis, G. and Schubert, W. H. (1991). Reflections from the Heart of Educational Inquiry, State University of New York. ・ 的場・柴田 編著 (2013) 『授業研究と授業の創造』 溪水社. ・ 浅田・生田・藤岡 編著 (1998) 『成長する教師：教師学への誘い』 金子書房. 		

・ ピーター・センゲほか（2014）『学習する学校 -子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する』英治出版

問い合わせ先 e-mail

オフィスアワー

授業科目名：授業研究の理論と実践				単位数：2
担当教員：				
曜日時限：			開講期：前期	
キーワード：授業研究，アクションリサーチ，リフレクション，同僚性，授業分析，事実にもとづく分析			授業形態：講義，演習	
到達目標 ※事務で入力します。				
3つの知 (学習成果の指 針)	学問知： *	技法知： *	実践知： *	*印の付いた知を修得で きます。
授業の到達目標 授業やカリキュラムを改善するための方法として，どのような授業研究が存在し，どのような改善が可能かを考えさせることを本授業の目標とする。具体的には，次のとおりである。 <ul style="list-style-type: none"> ・国内外の文献レビューをとおして授業研究の意義と可能性を説明できる。 ・発言記録にもとづく授業分析によって子どもの思考を追求できる。 ・自分の価値観にとらわれない，世界的な視点も有しながら，独自の授業研究・授業分析の方法を提案できる。 				
授業の概要 本授業では，国内外で取り組まれている授業研究を，分析方法や研究体制の観点で人称に分け，その意義や可能性を示す。授業研究をすること，またそれを継続し得られた知見を蓄積することの実際を，文献をとおして学ぶ。授業の終盤では受講者をいくつかのグループに分け，発言記録にもとづく授業分析を行う。これらの活動から，学校を基盤とした授業研究の可能性を模索する。				
授業の計画(準備学修を含む) 第1回：講義内容・方法に関するオリエンテーション 第2回：日本における授業研究の意義 第3回：世界の授業研究の動向（文献レビュー） 第4回：授業研究における理論と実践 第5回：一人称，二人称，三人称としての授業研究 第6回：一人称としての授業研究の実際 第7回：アクションリサーチ・授業リフレクションの文献レビュー 第8回：二人称としての授業研究の実際 第9回：校内研究・同僚性の文献レビュー 第10回：三人称としての授業研究の実際 第11回：授業分析の文献レビュー				

<p>第12回：発言記録にもとづく授業分析：小学校社会科を題材にした授業分析</p> <p>第13回：授業分析を通した子どもの思考の解明：小学校社会科を題材にした授業分析</p> <p>第14回：授業研究によるカリキュラムの編成と改訂</p> <p>第15回：学校を基盤とした授業研究の可能性</p> <p style="text-align: center;"><レポート課題></p>		
アクティブ・ラーニングのための工夫 (導入している工夫に*印を記入してください。)	(1)学生主体による学習形態の導入に関する工夫 ペアワーク, グループワーク, 事前の文献調査	*
	(2)学生が主体的に行う活動を導入する工夫 授業の分析, カリキュラムの開発, プレゼンテーション	*
	(3)教員と学生の双方向性の確保, 課題設定の工夫 授業用掲示板による議論, レポート, 演習	*
	(4)ツールの活用に関する工夫	
成績評価の方法 <ul style="list-style-type: none"> ・世界の授業研究に関する文献レビュー (20%) ・一人称の授業研究に関する文献レビュー (20%) ・二人称の授業研究に関する文献レビュー (20%) ・三人称の授業研究に関する文献レビュー (20%) ・授業内におけるペアワークやグループワークの議論, その結果のプレゼン (20%) 		
テキスト 特になし		
参考文献 <ul style="list-style-type: none"> ・ Cerbin, Bill (2011) Lesson Study, Stylus Publishing. ・ 木原「教師が磨き合う『学校研究』」ぎょうせい, 2006. ・ Norwich, B. and Jones, J. (2014) Lesson Study, Bloomsbury Publishing. ・ 名古屋大学・東海市教育委員会「授業記録による授業改革のプロセス」黎明書房, 2004. ・ 重松・上田・八田「授業分析の理論と実際」黎明書房, 1963. ・ Stepanek, J., Appel, G., Leong, M., Mangan, M. T., Mitchell, M. (2007) Leading Lesson Study, Corwin Press. ・ 吉崎・村川・木原「授業研究のフロンティア」ミネルヴァ書房, 2019 ・ Wiburg, K. and Brown, S. (2007) Lesson Study Communities, Corwin Press. 		
問い合わせ先 e-mail		
オフィスアワー		

C 開発的

授業科目名：教師の力量形成プログラムの開発				単位数：2
担当教員：				
曜日時限：			開講期：前期	
キーワード：校内研修，行政研修，ミドルリーダー，指導主事，プログラム			授業形態：講義，演習	
到達目標 ※事務で入力します。				
3つの知 (学習成果の指 針)	学問知： *	技法知： *	実践知： *	*印の付いた知を修得で きます。
授業の到達目標 国内外における教師の力量形成プログラムの開発動向や研究動向を理解するとともに、開発研究に求められる方法論を獲得することを目指す。具体的には、次のような目標を満たすことが期待される。 <ul style="list-style-type: none"> ・国内外における教師の力量形成プログラムの開発動向を説明することができる。 ・国内外における教師の力量形成プログラムを対象とした開発研究の特徴を説明することができる。 ・教師の力量形成プログラムを対象とした開発研究を構想することができる。 				
授業の概要 本授業では、教師の力量形成プログラムに関する開発動向や開発研究の事例分析を行う。その際、学術雑誌に掲載された論文や関連する書籍を個人あるいはグループで読み解き、研究的意義や方法論に関する工夫について整理してもらう。さらに、教師の力量形成プログラムに関する開発研究についてグループで構想してもらう。				
授業の計画(準備学修を含む) 第1回：講義内容・方法に関するオリエンテーション 第2回：教師の力量形成プログラムの全体像（行政研修，校内研修，自己研修） 第3回：国内における教師の力量形成プログラムの開発動向 第4回：海外における教師の力量形成プログラムの開発動向 第5回：国内における教師の力量形成プログラムを対象とした開発研究の事例分析 第6回：国内における教師の力量形成プログラムを対象とした開発研究の改善案の検討 第7回：海外における教師の力量形成プログラムを対象とした開発研究の事例分析 第8回：海外における教師の力量形成プログラムを対象とした開発研究の改善案の検討				

第9回：教師の力量形成プログラムの開発研究の構想（1）研究対象の設定		
第10回：教師の力量形成プログラムの開発研究の構想（2）プログラムのデザイン		
第11回：教師の力量形成プログラムの開発研究の構想（3）プログラムの評価方法の検討		
第12回：教師の力量形成プログラムの開発研究の構想（4）結果・考察の予想		
第13回：教師の力量形成プログラムの開発研究に関する構想発表と批判的検討		
第14回：教師の力量形成プログラムの開発研究に関する構想の改善案の検討		
第15回：全体のまとめ		
アクティブ・ラーニングのための工夫 （導入している工夫に*印を記入してください。）	(1)学生主体による学習形態の導入に関する工夫 ペアワーク、グループワーク、ジグソー法、反転授業など	*
	(2)学生が主体的に行う活動を導入する工夫 展示や作品の制作、調査、観察、実験、ロールプレイ、ゲーミング、プレゼンテーションなど	*
	(3)教員と学生の双方向性の確保、課題設定の工夫 コミュニケーションカード、レポート、演習など	*
	(4)ツールの活用に関する工夫 クリッカー、e-learning など	
成績評価の方法		
<ul style="list-style-type: none"> ・国内外における教師の力量形成プログラムの開発動向および研究動向をレポートにまとめる。（60%） ・教師の力量形成プログラムを対象とした開発研究の構想およびその研究的意義を発表し、レポートにまとめる。（40%） 		
テキスト		
・特になし		
参考文献		
<ul style="list-style-type: none"> ・木原俊行ほか『教育工学的アプローチによる教師教育－学び続ける教師を育てる・支える』ミネルヴァ書房，ISBN:978-4623075690 ・吉崎静夫監修・村川雅弘・木原俊行編著『授業研究のフロンティア』ミネルヴァ書房，ISBN:978-4623085576 		
問い合わせ先 e-mail		
オフィスアワー		

授業科目名：カリキュラム開発の実践的研究				単位数：2
担当教員：				
曜日時限：			開講期：前期	
キーワード：カリキュラム開発，カリキュラム評価，カリキュラム・マネジメント，アクション・リサーチ			授業形態：講義，演習	
到達目標 ※事務で入力します。				
3つの知 (学習成果の指 針)	学問知： *	技法知： *	実践知： *	*印の付いた知を修得で きます。
授業の到達目標 本授業では，国内外におけるカリキュラム開発の実践動向や研究動向を把握することを目指す。その際，カリキュラム開発に関わる複数の学問領域を幅広く対象として，検討を行う。具体的には，次のような目標を満たすことが期待される。 <ul style="list-style-type: none"> ・国内外におけるカリキュラム開発の理論的・実践的動向について説明することができる。 ・カリキュラム開発の研究事例にみられる特徴について説明することができる。 ・今後のカリキュラム開発の実践的研究を展望することができる。 				
授業の概要 本授業では，カリキュラム開発の実践動向や研究動向について理解することを目指す。よって，授業に先立ち，学術誌に掲載された論文や関連する書籍を読み解いてもらい，授業中にペアあるいはグループで検討する機会を設ける。第8回や12回の授業では，それまでに授業で扱った内容を俯瞰し，自分なりに整理してもらう。				
授業の計画(準備学修を含む) 第1回：講義内容・方法に関するオリエンテーション 第2回：国内におけるカリキュラム開発の実践動向 第3回：国外におけるカリキュラム開発の実践動向 第4回：国内外におけるカリキュラム開発の実践動向の比較 第5回：カリキュラム開発と授業研究の関係性 第6回：カリキュラム開発と学校経営の関係性 第7回：カリキュラム開発と教師の力量形成の関係性 第8回：カリキュラム開発に関わる諸要因のまとめ（第5～7回をふまえて） 第9回：カリキュラム開発の研究事例の分析（1）教育方法学との接点に着目して 第10回：カリキュラム開発の研究事例の分析（2）学校経営論との接点に着目して 第11回：カリキュラム開発の研究事例の分析（3）教師教育学との接点に着目して 第12回：カリキュラム開発に関する研究動向のまとめ（第9～11回をふまえて）				

第13回：国外におけるカリキュラム開発の研究事例の動向		
第14回：国内外におけるカリキュラム開発に関する研究動向の比較		
第15回：全体のまとめ		
アクティブ・ラーニングのための工夫 (導入している工夫に*印を記入してください。)	(1)学生主体による学習形態の導入に関する工夫 ペアワーク, グループワーク, ジグソー法, 反転授業など	*
	(2)学生が主体的に行う活動を導入する工夫 展示や作品の制作, 調査, 観察, 実験, ロールプレイ, ゲーミング, プレゼンテーションなど	*
	(3)教員と学生の双方向性の確保, 課題設定の工夫 コミュニケーションカード, レポート, 演習など	*
	(4)ツールの活用に関する工夫 クリッカー, e-learning など	
成績評価の方法		
<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム開発に関する理論的・実践的動向についてレポートにまとめる。(40%) ・カリキュラム開発の実践的研究の事例を分析し, レポートにまとめる。(60%) 		
テキスト		
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校学習指導要領および小学校学習指導要領解説(総則) ・中学校学習指導要領および中学校学習指導要領解説(総則) 		
参考文献		
<ul style="list-style-type: none"> ・田村知子『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい, ISBN: 978-4324100837 ・田中博之『カリキュラム編成論—子どもの総合学力を育てる学校づくり』放送大学教育振興会, ISBN: 978-4595140846 		
問い合わせ先 e-mail		
オフィスアワー		

実習科目

授業科目名：談話分析（授業研究会の記録分析）				単位数：2
担当教員：				
曜日時限：			開講期：	
キーワード：授業研究会，質的分析，談話分析，SCAT			授業形態：演習	
到達目標 ※事務で入力します。				
3つの知 （学習成果の指 針）	学問知： ＊	技法知： ＊	実践知： ＊	*印の付いた知を修得で きます。
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業研究における談話分析の意義を説明することができる。 ・ 談話分析の手続きと研究成果の事例について説明することができる。 ・ 自ら立案した研究計画に基づきながら分析を行い，研究成果を示すことができる。 				
授業の概要 <p>授業研究会の意義を説明したり，課題点を抽出して改良したりするためには，根拠に基づいて現状を適切に把握し，関係者の理解を得ることが重要である。本科目では，その一手段となる談話分析に関する知識や技術を，事例調査や演習を通して習得する。なお，演習においては，データ収集の計画から分析結果の文書化および口頭説明まで行う。</p>				
授業の計画(準備学修を含む) <p>第1回：講義内容・方法に関するオリエンテーション</p> <p>第2回：授業研究会を対象とした質的研究の事例調査（事後：調査結果の文書化★1）</p> <p>第3回：調査結果の報告と研究方法の類型化および談話分析の意義や位置づけの考察</p> <p>第4回：授業研究会における談話の分析手法の練習（ビデオ記録からの記録おこしと分析）</p> <p>第5回：分析結果の中間説明と相互検証</p> <p>第6回：分析対象や手続き及び結果と考察の文章化</p> <p>第7回：研究発表演習と分析意義の再考察（事後：研究意義の文書化★2）</p> <p>第8回：授業研究会（校外実習）の計画と準備（研究会実施の調査，視点，役割，用具等）</p> <p>第9回：授業研究会の談話記録（校外実習）（事後：記録おこし）</p> <p>第10回：記録の分析</p> <p>第11回：分析結果の中間説明と相互検証</p> <p>第12回：分析対象や手続き及び結果と考察の文章化（★3）</p>				

<p>第13回：授業研究会における談話分析をさらに深いものにするための発展的な研究計画（例 ：同市内で複数の校内研修の談話を比較，複数回の継続的な研究など）</p> <p>第14回：研究計画の共有と相互評価（事後：相互評価結果と考察の文書化★4）</p> <p>第15回：総合考察，作成済み文書類を再構築した最終レポートの提出</p>		
アクティブ・ラーニングのための工夫 （導入している工夫に*印を記入してください。）	(1)学生主体による学習形態の導入に関する工夫 グループワーク	*
	(2)学生が主体的に行う活動を導入する工夫 学生による研究計画の立案と試行	*
	(3)教員と学生の双方向性の確保，課題設定の工夫 学習支援システムの利用など	*
	(4)ツールの活用に関する工夫 学習支援システムの利用など	
成績評価の方法 <p>下記の章立てに基づいて編集した最終レポート（60%）と，学習への参加・貢献や課題の提出率（40%）から判断します。</p> <p>1章 授業研究における談話分析の意義（「授業の計画」の★2を活用）</p> <p>2章 談話分析の手続きと研究成果の事例（「授業の計画」の★1を活用）</p> <p>3章 自ら立案した研究計画に基づいた分析結果（「授業の計画」の★3を活用）</p> <p>4章 さらに発展させるための研究計画（「授業の計画」の★4を活用）</p>		
テキスト <p>特になし</p>		
参考文献 <ul style="list-style-type: none"> ・大谷 尚（2007）4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学 54(2), 27-44 ・秋田喜代美編（2010）教師の言葉とコミュニケーション—教室の言葉から授業の質を高めるために，教育開発研究所 		
<p>問い合わせ先 e-mail</p>		
<p>オフィスアワー</p>		

執筆者一覧

監修者（執筆担当）

木原 俊行（教師教育の専門的研究のための修士課程カリキュラム（案）
担当）

大阪教育大学大学院教授

執筆者

深見 俊崇（シラバス案①担当）

島根大学教育学部准教授

坂本 将暢（シラバス案②，③担当）

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授

島田 希（シラバス案④，⑤担当）

大阪市立大学大学院文学研究科准教授

古田 紫帆（シラバス案⑥担当）

大手前大学現代社会学部准教授

※監修者，執筆者の所属は 2019 年 3 月時点でのものです。

=====

教師教育の専門的研究のための修士課程カリキュラム（案）

監修：大阪教育大学大学院教授 木原 俊行

発行：2019年3月

=====

本事例集は、科研費（基盤（C）研究課題番号：16K01110 研究代表者：木原俊行）「教育工学的な視点に基づく教師教育プログラムの開発－ハンドブックを主教材として－」による成果物です。